

特集 主任児童委員のためのオンラインサロンがつなぐもの

～これまでの実践とこれからの可能性～

インフォメーション

- 船橋会長就任あいさつ…………… 5
- 道民児連の新役員等体制…………… 5
- 令和8年度事業計画・
道民児連事業日程表・収支予算…………… 6
- クローズアップ「この人」…………… 7
- おすすめ書籍「ブックレビュー」…………… 8
- エッセイ：ひとをつなぐ
「**⑩**渡されたバトン」…………… 8

症予防対策を講じて分散協議を実施する予定の開催案内を行いました。感染力が高いとされるデルタ株の出現により全道域の対策が講じられ、札幌市との不要不急の往来自粛要請が出されたため、全道児童の開催は中止することとなりました。

また、地域において主任児童委員は、当然、学校訪問もできず、学校関係者、子どもやその家族とコミュニケーションをとる方法に苦慮することとなりました。当時は、民児協定例会や研修会の開催もままなりませんでしたが、令和元年12月に委嘱を受けた区域担当の民生委員児童委員もそうですが、特に主任児童委員におかれては、何をすればよいのか分からない状況が続いたという方が多くいらしたのではないのでしょうか。

道民児連では、その当時から、主任児童委員が地域や民児協の中で孤立してしまうことにならないように、主任児童委員同士で横の繋がりを持ってもらえるような仕組みが作れないかと考えていました。

■交流サロンの仕掛け

令和4年度の全道児童は、一

部オンラインによるプログラムも取り入れたハイブリット開催により、3年振りに2日間日程で実施しました。そして、その

1日目の最後に「交流サロン」のプログラム（60分）を初めて組み込みました。「交流サロン」は、希望する対面参加者（105名）のみを対象とし、①相手はこだわらない、②主任児童委員同士、③児童委員同士の3区分で18テーブル設置しました。そして、情報交換の進め方とメンバーだけを示し、内容やテーマは自由、記録をとるのも不要、全体発表もなしとしました。

全員マスク越しの情報交換ではありましたが、参加者の反応がとてよく、会場は大変な盛り上がりを見せました。話ができる喜びを感じ、とても素敵な表情で情報交換をされていた参加者の情景が今でも心に浮かびます。後日取ったアンケートでは、良かった64・9%、良かったに近い33・3%と、合計98・2%の方が高評価の回答をされています。また自由記述の回答には「交流サロンの時間は、意見交換ができてとても楽しく学べました。時間が足りないと思うくらいでした」などの意見が多く寄せられ、次の年から時間を

90分に延長したところでは、

■オンラインの試み

コロナ禍を経験し、道民児連事務局に身に付いたスキルの一つにオンライン会議などのリテラシー（情報を正しく理解し活用する力）があげられます。当初は、必要に迫られての試みでしたが、感染症の拡大に伴い、オンライン会議が社会の本流となっていた背景が多分にありました。

そうしたときに、いつも研修事業で講師をお願いしている長谷川聡氏（道民児連特別講師・元北海道医療大学准教授）から「主任児童委員がオンラインサロンで繋がれたらいいよね」とお話をいただきました。それはまさに、蓄積されてきたオンラインスキルを活かした「もう一つの交流サロン」の取り組みとして考えていた試みであったことから、道民児連では、令和4年度全道児童のアンケート調査項目の中に、「オンラインサロンの定期開催について」を入れて参加者の意向と意見を伺いました。アンケート結果は、参加したい41・3%、参加したいがインターネット環境が整っていない28・0%と、7割近い方が参加したいという回答でした。

■主任児童委員のためのオンラインサロン

令和5年10月、長谷川講師が作成された「北海道主任児童委員オンラインサロン企画案」をベースに、本格的な検討が始まりました。事業名称は「道民児連おしゃべりサロン」とし、長谷川講師にコーディネーターをお願いして、午前と午後それぞれ90分のオンラインサロンを開催することにしました。

令和5年度は2回の実施に留まりましたが、おしゃべりサロンのアンケートからも期待通りの成果を得ることができました。で、次年度の開催に向けて、長谷川講師と申し合わせを行い、開催時間区分に夜間（19:00～20:30）を加えて年6回開催すること、適度な参加定員の設定、具体的なトークテーマは設定しないで「ぎすぎすづくり」をコンセプトとし実施することなどを確認しました。加えて、オンラインで出会った参加者同士を8月の全道児童で対面させる仕掛けも重要であることが議論され、令和6年度全道児童の交流

サロンで、オンラインサロン参加経験者のテーブルを指定し、「おしゃべりサロンオフ会」として実施しました。

■主任児童委員のためのオンラインセミナー

令和7年度、おしゃべりサロンの特別企画として「主任児童委員のためのオンラインセミナー」（以下、「セミナー」）を開催しました。当日のプログラムは、①長谷川講師に対談方式で講話いただき、②主任児童委員2名から実践報告、参加者を4グループに分け、③グループワークによる情報交換、④ふりかえりというものでした。

セミナーを終えて、長谷川講師に感想やこれからの展望などを伺いました。

■オンラインサロンを「共に歩み、語り合える心の拠点」に

（特別講師・長谷川聡）

たくさんの主任児童委員の方から、「新任で何をすればよいのかわからない」「自分の活動はこれでいいのだろうか」「他の地域ではどうしているのだから

●これまでの実施状況

年度・回	開催日	時間	参加者
令和5年度 第1回	令和6年2月16日(金)	10:00~11:30	12名 (10市町村)
第2回	令和6年2月29日(木)	13:30~15:00	9名 (7市町村)
令和6年度 第1回	令和6年6月17日(月)	10:00~11:30	5名 (4市町村)
第2回	令和6年6月28日(金)	13:30~15:00	最少催行人数に満たず中止
第3回	令和6年7月11日(木)	19:00~20:30	9名 (7市町村)
第4回	令和6年12月2日(月)	10:00~11:30	2名 (2市町村)
第5回	令和7年1月23日(木)	13:30~15:00	9名 (5市町村)
第6回	令和7年2月6日(木)	19:00~20:30	5名 (4市町村)
令和7年度 第1回	令和7年6月27日(金)	10:00~11:30	5名 (3市町村)
第2回	令和7年7月10日(木)	13:30~15:00	7名 (4市町村)
第3回	令和7年8月7日(木)	19:00~20:30	2名 (2市町村)
オンラインセミナー	令和8年2月18日(水)	13:30~15:30	75名 (32市町村)

う」「すべて任せると言われ困っている」との不安ともいえる言葉を、特にコロナ禍以降、何度も耳にしてきました。主任児童委員制度開始からまだ30年余り。自治体ごとの人数が少なく、明確な業務マニュアルも確立されていない中、多くの皆さんが

個人の経験や熱意に頼りながら、手探りで活動を続けてこられたと思います。広大な面積と厳しい冬季の寒さを持つ北海道では、物理的に集まるのが難しく、どうしても孤独感や活動の困難さを抱えやすい環境にあります。皆さんが孤立せずに活動を展開していくためには、本音で困りごとを語り合える「人のネットワーク」が不可欠です。これまでのオンラインサロンでは、参加した皆さんから多くの気づきが寄せられました。他の地域の事例を知ることが、自身の活動や置かれた状況を振り返り、客観的に見つめ直す良い機会となつていくようです。特に「悩んでいるのは自分だけではなかった」と知ること得られる安堵感は、何物にも代えがたいようでした。仲間の事例や経験談そして励ましは、自ら課題解決しようとする勇気や、共に歩む仲間意識を育みます。委員一人ひとりの背景や地域課題は千差万別ですが、その多様な経験を分かち合うことは、将来の委員にとつても役立つ「心の知恵(知的財産)」の積上げへと繋がります。

今後のサロン運営では、私の専門であるコミュニケーション

学の知見を取り入れた、より効果的な場づくりを目指します。高度情報化社会の今こそ、信頼関係に基づく「口コミ」や「きめ細やかな情報」の価値が高まっています。出会う人の名前と顔と個性を互いに知り合うことを「顔の見える交流」と言います。その交流を繰り返すことで、信頼と情報の質はさらに深まります。そしてオンラインとオフライン(対面)を賢く組み合わせることで、より強固な人間関係を築いていければよいと考えています。

今後の展開への具体的提言として以下の点を大切にしたいと思えます。

1. 少人数の対話…全員が発言しやすいよう各回2〜6人程度で開催します。
2. 心地よい時間設定…画面越

3. 自由な参加と話題…定期的に参加しつづ、参加は自由とします。特定のテーマに縛られず、フリートーク中心に進めます。

主任児童委員の活動は、地域の子どもたちの未来を支える尊い仕事です。その歩みを止めることなく、より豊かなものにするために、オンラインサロンという「心の拠点」を共に築いていきませんか。繋ぐことが仕事なら、まずは自分自身が繋がること。皆さんの経験や想いが誰かの支えになり、そして自分身の力にもなる。そんな温かな繋がりを、共に創っていかれることを願っています。

アンテナ道民児連No.225

特集「令和7年度全国民生委員児童委員大会北海道大会」

開催報告掲載内容の訂正について

No.2253ページ掲載内容

特集の中で、■特別講

義「なぜ人と人は支え合うのか」についてご紹介した内容に誤植がありましたので、お詫びして訂正いたします。

鹿野靖明(しかのやすあき)氏

プロフィール

【誤】1959年(昭和34年生まれ)

【正】1959年(昭和34年生まれ)

会長就任のごあいさつ

北海道民生委員児童委員連盟

会長 船橋 優子



このたび、佐川徹前会長の後任として会長に就任いたしました船橋優子です。

昭和24年に法人化された北海道民生委員児童委員連盟の歴史と伝統ある役割を引き継ぐこととなり、その責任の重さに身の引き締まる思いでおります。

近年、民生委員児童委員を取り巻く環境は大きく変化しています。地域社会のつながりの希薄化や、委員のなり手不足、活動の負担感など、さまざまな課題が指摘されています。こうした状況の中で、

地域住民の身近な相談相手としての役割を担う民生委員児童委員の存在は、これまで以上に重要になっています。

北海道には約一万人の民生委員児童委員が、それぞれの地域で住民に寄り添いながら活動しています。一人ひとりの力は決して大きくないかもしれませんが、その思いと行動がつながることで、地域の

支え合いの輪が広がり、北海道の地域福祉を支える大きな力になるものと信じています。

本連盟としても、委員の皆さまが安心して活動を続けられる環境づくりに努めるとともに、民生委員児童委員活動の充実と発展に向けて取り組んでまいります。

今後とも、皆さまのご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

道民児連役員等の

新体制

について

一斉改選にともない、正副会長理事・ブロック理事、ブロック評議員の補欠選任が行われましたので、道民児連役員等の新体制についてお知らせします。

理事 任期〳令和8年事業年度の最終の定時評議員会終結時まで

会長 船橋優子（函館市／新任）

副会長 岸田勤（石狩地区／新任）、田中幸憲（北斗市／新任）、大西笑子（宗谷地区／新任）

常務理事 長谷川稔（道民児連事務局長）

理事 五十嵐智（オホーツク地区／新任）、市川陽一（旭川市／新任）、

直江昭憲（室蘭市／新任）、金澤尚秀（網走市／新任）、佐藤郭嗣（士別市／新任）、

佐々木正美（三笠市）、森田優（伊達市／新任）、大西登志子（北広島市／新任）、佐藤隆久（道社協）

監事 任期〳令和10年事業年度の最終の定時評議員会終結時まで

監事 森田信子（学識経験者）、高橋伸一（税理士）

評議員 任期〳令和10年事業年度の最終の定時評議員会終結時まで

評議員 春日谷賢一（胆振地区／新任）、野中榮修（日高地区）、鈴木憲和（上川地区／新任）、

高橋隆子（釧路地区）、西尾伊都子（小樽市／新任）、橋井弘子（北見市）、

多喜芳勝（夕張市）、松村順子（苫小牧市／新任）、家坂登（稚内市／新任）、山川宏治（紋別市）、松田尚美（富良野市／新任）、竹中洋子（登別市／新任）

この人

真狩村民生委員協議会主任児童委員
漆原千鶴子さん

真狩村は、北海後志総合振興局にある町このまち。美しい裾野を引くコニーデ型の火山、蝦夷富士こと後方羊蹄山の南麓に位置する村です。

開拓期以来、農業を基幹産業として発展した村は、特産のゆり根や豆類、イモ類などが全国区でブランド化しているほど。また、近年はニセコのインバウンド需要にけん引されてか新規移住者も増えて、センスのいいカフェやベーカリーなどが相次いで開店し、新しい魅力も備わりつつあります。

この村の主任児童委員として活躍する漆原さんにお話を伺いました。

山麓のまちに生まれて

現在、漆原さんは、真狩村のオホナイ地区で農業を営んでいます。生まれ育ちも真狩だということで、代々農家の家柄かと伺うと、意外にも「鍛冶屋の娘です」との答えが返ってきました。「私の父は、農業機械の分野では少しは知られた人物でした。鍛冶の技術を用いてイモの培土器を製作し、道知事から表彰されたりしていました」。

そんな漆原さんが真狩を離れたのは、短大時代の2年間だけ。短大で身に付けた知識を活かし、村に戻ってからは保育士として活躍。その経験を買われて平成20年に委嘱を受けて以来、一貫して主任児童委員を続けてきました。「主任児童委員は、子どもとの心の距離が近くなくては務まりません。自分の子どもたちが巣立った時、委員を続けられるか悩んだのですが、なんとか今日までやってきました」と漆原さん。

心の距離をどうつかむ

漆原さんの居住している地区には、かつて小学校がありました。しかし近年、児童数の減少で、村の中心にある学校に統合されてしまったと言います。住区から学校がなくなってしまうものの、子どもたちは

変わらず暮らしています。地域と子どもたちが途切れることを避けたいと考えた末、村役場を通じて統合先の学校に申し入れ、訪問を含む見守り活動を行うことにしました。

漆原さんが子どもたちと関わる中で、年々臆らむ気がかりなことがあると言います。

「真狩に限ったことではないのですが、子どもとの距離をつかめない親が増えていると思うのです。だから子どもを叱れない。親も自分の世界に収まって出てこようという。表面的には喧嘩のない家庭ですが、子育ての大切な局面が抜け落ちている気がします」。各家庭の教育方針を批判できる立場ではないとしながらも「子どもたちが、やがて直面する問題を解決しようとする時に、重大な瑕疵につながるようで心配」と漆原さん。主任児童委員として許される範囲で、子どもたちの心の有り様を追い続けたいと言います。

コミュニケーションは笑顔から

昨年、漆原さんは、意外なかたじけなく新しいコミュニケーション術にヒントを得たそうです。それは、肩を怪我して入院していた病棟での出来事でした。

「私の後から入院されてきた患者さんのことです。フットサルをやっ

ているその若い患者さんは、膝や腰を痛めて何度も入院を繰り返しているようでした。看護師や療法士とも仲が良いのですが、とにかく声が大きくていつも笑っている。彼女が、それまで鬱々としがちだった病室の空気を一時に変えてしまったのです。最初は病室で大きな声で話すことにたじろいだ漆原さんでしたが、しかしやがて、同室の入院患者たちが弾けたように会話するようになったさまを目の当たりにしました。ついには、病棟全体の患者たちが明るく声を掛け合うまでに変化したと言います。

「心を開かせる力とは、人を笑顔にする力と同義なのだ、その時初めて気が付きました。私は元来、器用に会話を盛り上げるタイプではありません。でも、病室での一件以来、一緒にいる人を笑顔にできるような会話を身に付けようと思ったのです」。

主任児童委員を務める中で、傾聴に徹することが大変重要な姿勢であることは疑いようがありません。しかし、相手の心の声を引き出すためには、話したくなる「場づくり」がどれほど大切なことか。この時の経験を振り返り、漆原さんは「文字どおり、怪我の功名です」と言って朗らかに笑いました。



図解でわかる災害福祉



山本 克彦 著
中央法規出版
2,420円(税込)

■ 内容

東南海トラフに千島海溝、そしていくつものプレートがせめぎ合う日本列島。地下に蓄積された巨大な歪みが大地震を引き起こす日は、必ずやってきます。

年間を通じて数力所から十数力所の火山で何らかの活動が確認されているにも関わらず、大規模御噴火は100年以上発生していないことも私たちが抱える不安のひとつです。さらに、気候変動の進行による極端気象現象は、これからさらに頻発することが予想されています。

日本がこれほどの災害大国でありながら、そこに暮らす私たちは、正しく災害と向き合う知見を持っていないのでしょうか。

筆者は日本福祉大学で教鞭を執りながら、全国の災害地域でフィールドワークを重ねる災害福祉研究の第一人者。本書では、災害とは何かに

ついでに定義付けに始まり、とてもそれは曖昧になりがちなる有事の要支援者をめぐる問題の再構築を進めます。まず、災害発生の原因・要因を知ることからスタート。その上で避難

時の対応、要支援者への具体的配慮医療・看護、復興、さらには予防対策や法制度まで、災害支援に関わる幅広い知見を、図解を交えてまとめられています。それは、多様な要支援タイプ別にどうした対応が有効なのかといったレベルにまで及びます。

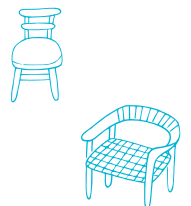
筆者の提案は、BCP (Business Continuity Plan) や DWAT (Disaster Welfare Assistance Team)、災害派遣福祉チームに至る実践的提案にも及びます。つまり、緊急時の支援に関わる立場であれば、誰もが押さえるべき情報が凝縮されているのです。来たる日に向けて読んでおきたい一冊。

エッセイ



18 渡されたバトン

鳥居 一頼



民生委員として尽くした父
惜しまれて引退した
バトンを渡された娘
自分の番だと自覚した

マチの幸せづくりだと語った父
しんどく暮らす人に身を添えた
後ろ姿を見てきた娘
ひとつこの良さは親譲りだ

地域の人に慕われた父
求められて生きがいを見つけた
地域で育てられた娘
少しでもと謙虚に構えた

仲間育てられたと父
民児協のこれからの期待した
世代の狭間を埋める娘
気負わず無理せず一歩を踏み出す

人生死ぬまで勉強だと父
福祉やボランティアを担った
手ほどきを受け始めた娘
頭と心にスッと言葉が収まる

娘におもいを託す父
人様に必要とされる人となれと
父を誇りに思う娘
地域の御用聞きから始めます

【筆者紹介】

鳥居 一頼(トリイ カズヨリ) 1949年生、登別市出身、北海道教育大卒。道内で18年間教壇に立つ。道教委、道庁などに勤務後、室蘭・登別で小学校校長歴任。その後関西の私立大学の教授。現在、登別市きずな大使として市社協の地域福祉実践計画推進を支援するかたわら、地域福祉アドバイザーとしても活動している。社会福祉法人北海道友愛福祉会理事。また道民児連が令和5年より設置した「民児協のあり方検討委員会」の委員長を担われている。『民生委員児童委員のためのワークショップのすすめ』(道民児連2021年刊)の中で詩集『情緒は私を支配する。論理よりも強く』が教材化され、初任者研修では詩をもちいた斬新な研修スタイルが評価されている。主な著書に『子どもと学ぶボランティア』(こっちょのボランティア授業論) (大阪ボランティア協会など)。